

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第5号 畜産

発行日 平成28年 7月28日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net/agri/>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

◆ 飼料作物

【牧草】

草地更新 秋播種にむけて、播種床を準備する時期です。耕起、碎土、整地作業は丁寧にいき、膨軟な播種床を作成します。最後の鎮圧作業は念入りに行います。

【飼料用トウモロコシ】

電気柵のポリワイヤーの緊張は専用緊張具を使用します。

電気柵のアースが確実に効いているかを確認します。

◆ 乳牛

暑熱ストレスによるアシドーシスを防止します。乾乳牛も暑熱対策を実施します。

1 草地管理

(1) 除草剤の播種日同日処理における播種床の作成

ア 永年草牧草は、8月中旬から9月中旬を目安に播種しますが、播種の約30日前(7月中旬から8月上旬)に播種床を予め形成し、雑草を十分に生育させます。

雑草の生育状況をみて展葉が十分であれば、経過日数にこだわらず非選択性除草剤を散布します。雑草が大きくなりすぎると播種や施肥作業の妨げになることがあります。

イ 前植生処理が未実施の場合は、速やかに非選択性除草剤を散布するか刈払を行います。

ウ 耕起作業では、ルートマットが確実に土壌と混和するよう十分な深さを確保します。耕起作業の良否が次ぎの碎土・整地作業の精度に影響します。

エ 堆肥は、10アールあたり5tを目安に散布します。炭カルなど土壌改良資材を必要量施用します。

オ 碎土・整地作業は、ルートマットが確実に土壌と混和するよう、また、施用した堆肥や土壌改良資材が十分に土壌と混和するよう丁寧に行います。十分に碎土された膨軟な播種床は、牧草の出芽と定着を高めめます。

カ 鎮圧は2～3回丁寧にいきます。表土は硬くなりますが、牧草はきちんと出芽し、その後の定着や初期生育が改善されます。また、更新後の降雨による土壌流失を最小限にとどめることができます。

図1

除草剤の播種日同日処理の概要

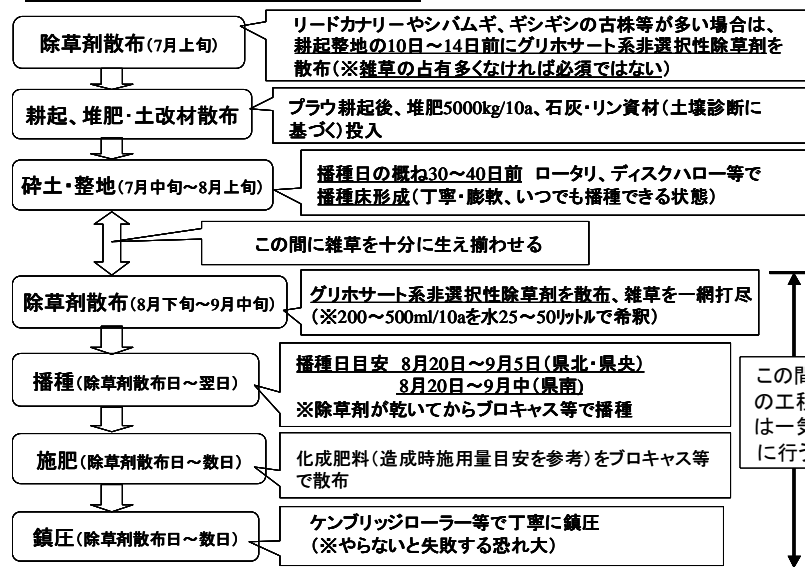


写真1 雑草を生え揃わせて除草剤散布

※ 除草剤散布から鎮圧まではできるだけ期間を空けずに進めます。面積と時間を考慮の上、作業計画をたてましょう。

2 飼料用トウモロコシのクマ食害防止対策

(1) 電気柵の設置作業の省力化

設置の際にはポリワイヤーはできるだけ始点から途中で支柱やガイシに巻きつけたり、結びつけずに終点までもっていきましょう（写真2）。

ワイヤーが弛緩していても緊張は専用の道具（緊張具）を使うことでかけることができます（写真3）。こうすることで撤去時に結び目を解いて歩く必要がなくなり、ワイヤー回収スピードが格段にアップします。



写真2

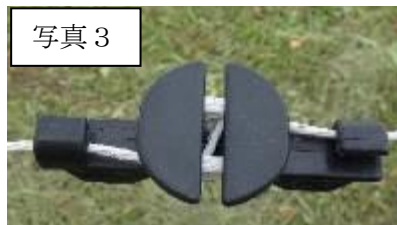


写真3



写真4

(2) アースがきちんと効いているかを確認

土壌条件などでアースの効きが弱いときはアース棒を追加するなどを行います。そうすることでポリワイヤーに流れる電圧が上昇します。

アースがきちんと効いているかどうかは電圧計をあてるとわかります（写真4）。十分に効いていれば電圧計に表示されません。1.0kVより高く表示される場合はアースの追加を考えましょう。

3 乳牛への暑熱ストレスの影響を緩和

暑熱ストレスをうけた牛は反芻時間が少なくなるため、アシドーシスになりやすくなります。

(1) アシドーシス対策（搾乳牛）

最重要：暑熱期には給与飼料全体の粗飼料割合を下げてはいけません！！

穀物類を消化のよい粗飼料かビートパルプやマメ皮などに置き換えてやります。

その他、主な対策は下記のとおりです。

ア 嗜好性のよい、消化率の高い粗飼料を給与する

これによって乾物摂取量を高く維持し、粗飼料からより多くのエネルギーを得ることができます。

発生熱は繊維>穀物、脂肪ですが、粗飼料の消化率が高くなればルーメン滞留時間が短くなり、発生熱は少なくなります。

イ カサのない飼料をやりすぎない

粗飼料をビートパルプに置き換えるとカサがなくなり、一気に喰いしやすくアシドーシスになりやすくなります。

ウ ルーメンpH低下を緩和するため重曹を増給または自由採食させる

重曹はルーメンでの発酵熱を増やさずに牛にルーメンpH緩衝材を供給できる便利なものです。100～200g/頭/日を目安にします（注意：乾乳牛には給与しない）。

(2) 乾乳期の暑熱ストレス対策

乾乳期は次泌乳期への大事な準備期間です。分娩後の産乳に備えて乳腺組織やルーメンの絨毛組織を再生させます。乾乳期間に暑熱ストレスを受けてしまうと、いくら良質な飼料を与えても食い込むことはできません。また、**乾乳中にヒートストレスを受けた牛は受けなかった牛と比べて、乳腺細胞の増殖速度が低くなり、乳生産量が低下するという報告もあります。**

暑熱ストレス対策は搾乳牛に気を配りがちですが、乾乳牛も暑熱ストレス対策が必要です。

次号は8月25日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を蒸散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

中央農業改良普及センター・地域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。

